

今日のところは、第3回目の伝道を終え、その報告のためにエルサレムの教会を訪れたパウロが、そこで捕えられ、ローマ軍の兵営に連れて行かれる途中、千人隊長の許可を得てユダヤ人たちに向けて演説をしたところ続き。

6 - 11 節

パウロがダマスコの途上で回心したあの劇的な体験が語られている。ここは、9章3節から18節に既述されている出来事と重複する。細かな点はそこと読み比べてみると分かるが、いくつかの点で目立っている違いが分かる。

6節、「真昼ごろ」という一日で一番明るい時に「強い光が……照らしました」というのは、尋常ではない。9節までいくと「一緒にいた人々は、その光は見たのですが、わたしに話しかけることは聞きませんでした」と言われている。これは9章7節では「声は聞いても、だれの姿も見えなかった」のだと言って、こことは逆のことを言っている。今日のところでは、特に「わたしに話しかけた方の声」つまり「言葉として聞く」ことがなかったという。

11節まで進むと、「わたしは、その光の輝きのために目が見えなくなっていたので、一緒にいた人たちに手を引かれて、ダマスコに入りました」とある。「光の輝き」の「輝き」は、原文では「栄光」(δόξα、トクサ)となっている。9節によると「一緒にいた人々は、その光を見たのです」。しかし盲目にならずにパウロの手を引いてくれた。パウロだけが、この「光」を見て、その「輝き」(=栄光)によって「見えなくなった」。14節でアナニアが解説するように「あの正しい方に会わせ」られた、つまり主イエスの栄光に触れたことが、パウロの目が見えなくなった本当の原因である。

そして、この「正しい方」イエス・キリスト「に会う」、イエス・キリスト「を見る」ということが、使徒としての資格である。パウロは、コリントの信徒への手紙一9章1節で「わたしは自由な者ではないか。使徒ではないか。わたしたちの主イエスを見たではないか」と主張しているが、それはこの時の体験による。

10節。パウロは「『主よ、どうしたらよいのでしょうか』と申し」あげた。この「どうしたらよいのでしょうか」という表現は、例えば2章37節で、ペンテコステの日、ペトロの説教を聞いたユダヤ人たちが「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と尋ねる。あるいは16章30節で、フィリピの牢獄の看守が大地震の後、パウロとシラスの前で「先生方、……どうすべきでしょうか」と尋ねたのと同じ質問である。つまり、今までの生き方をここで大転換するという意思表示である。

これに対し、12節から16節までに、「アナニア」という人が遣わされてきて、どうすべきかを教えてくれる。

12節。アナニアは「律法に従って生活する信仰深い人」、しかもダマスコ「に住んでいるすべてのユダヤ人の中で評判の良い人」であった、という。アナニアは「兄弟サウロ」と呼びかけ、「あの正しい方」といって主イエスを紹介する。つまりキリスト者であった。そこから考えると、良いユダヤ人として評判を勝ち取っていることと、イエス・キリストを信じるということとは両立するのであって、決して対立するものではないということを、この12節でパウロははっきりと主張しているのが分かる。

13節。「見えるようになりなさい」と言われて「見えるようになった」ということは、アナニアが語ったこの時の言葉が、ただ人間的な言葉ではなくて天的なメッセージである、超自然的な啓示である、ということのしるしである（神が、「光あれ、と言われると光があった」とあるように）

このことを分かった上で、アナニアは14節から16節までにおいてなすべきことを告げる。「先祖の神が、あなたをお選びになった」のは、「御心を悟らせるため」。

パウロはローマの信徒への手紙2章17節でユダヤ人のことを語って「神を誇りとし、その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています」(17-18節)というユダヤ人の誇りを問題にした。つまり、ユダヤ人たちは「律法によって」「神の御心を知らされている」と誇っていた。

ところが、このアナニアの言葉によると、それでは不十分だと分かる。いくらガマリエルの膝元で律法について熱心に学んでいても、まだ「御心を悟る」というところにはたどり着いていない。それには「あの正しい方に会う」ということが必要である。つまり、ユダヤ教は未完成であって、主イエス・キリストを知ることによって完成される。だから、ローマの信徒への手紙10章2節でパウロは、ユダヤ人が「熱心に神に仕えていることを証しますが、この熱心さは、正しい認識に基づくものではありません」と言い切っている。熱心であるがまだ主イエス・キリストを知らないという点では「正しい認識に」立っていない、そういう「熱心」である。

16節。主イエス・キリストとキリスト者に対して行ってきた迫害、これが「罪」である。その「罪」が赦される為には、逆に「その方の名を唱えて、洗礼を受けて洗い清めなさい」という。

17-21節。エルサレム神殿においてパウロが見た幻について語る部分。これは9章には記されていない。

これは、9章26節以下によると、回心したサウロがダマスコで福音を伝え始めたために命を狙われて、それでエルサレムにやって来た。今日のところの「わたしはエルサレムに帰って来て」というのは、そのことを指すと思われる。9章には記されていないが、パウロのその時「神殿で祈っていた」のである。その時に恍惚状態になって「主にお会いした」という。「人々が受け入れないからである」。9章29節でもパウロがエルサレムに帰って来てイエス・キリストのことを証して「議論もしたが、彼らはサウロを殺そうとねらっていた」とある。21節。「行け、わたしはあなたを遠く異邦人のために遣わすのだ」。このことをパウロは幻のうちにはっきりと示された、という。